小田原史談

第66号
発行所　小田原史談会
小田原市南町2－2－15

史跡を訪ねて

お奨めする「くら街道」を歩く会

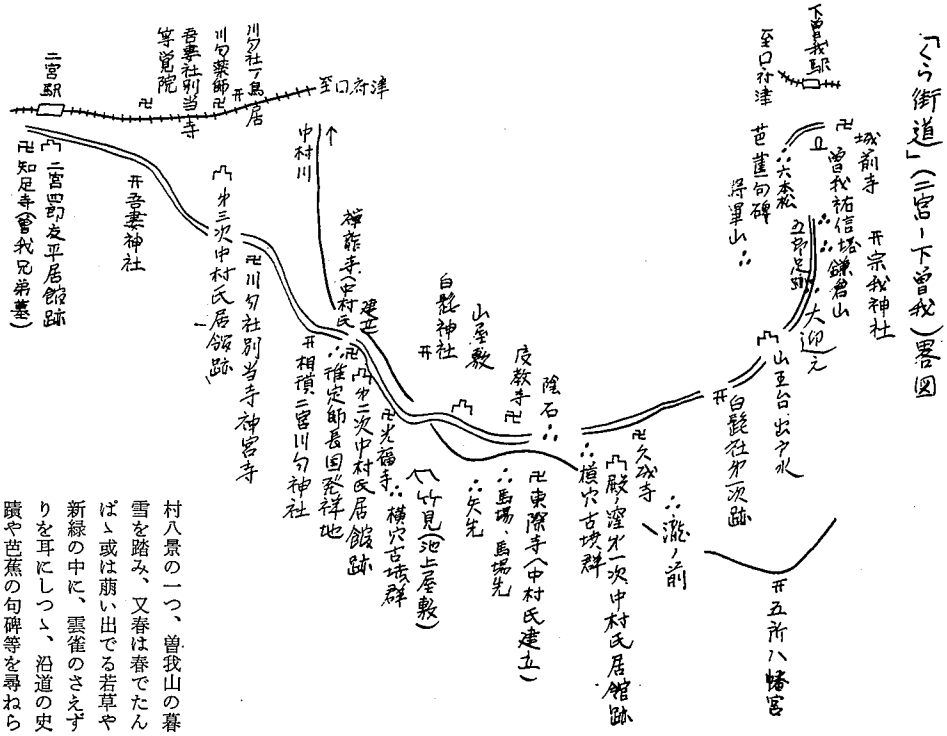
竹見竜雄

「くら街道」とはこの地方で、「鎌倉街道」を略した名称である。亦会といっても唯一日だけのことで、歩く区間も二宮駅から下曽我駅迄を対象としている。

治承四年（一一八〇）八月二十三日、長らく伊豆は蛭ヶ小島に流されて居った源頼朝は、この地の豪族中村氏一族をはじめ、源家にゆかりのある阪東武者の助力を得て石橋山に旗揚げをし、一たんは敗れたがその後勢力をもりかえし、終に平家一門を亡ぼし、鎌倉に兵馬の権はもちろん政治経済等の実権までも握った、実に我が国史上画期的な政治を行ふ幕府を開いた。而かし源氏は僅か三代でおしくも終ったが、執権北条氏は他のことはともかく、政治面に於ては頼朝の武士道奨励、質実剛健、質素倹約等の精神を良く守り、鎌倉幕府は凡そ百五十年もの長い間続き、その間源家の御家人や北条氏の家臣等、よくこの幕府に従がい、幕府に事ある節は「いざ鎌倉」の合言葉の如く、皆鎌倉へと走せ参じた。これ等御家人や北条氏の家臣は、防東は申すに及ばず、広く津々浦々に至る迄蟠蜿し、それ等御家人や家臣が鎌倉に走せ参じた道が、これ皆鎌倉街道と称されたが、現在はおしくも忘れ去られて次第に消え去りつゝある。

我が橘地区には中村郷の豪族中村氏や、お隣りの曽我氏等が鎌倉に走せ参じた所謂鎌倉街道が今もはっきりと残っている。而かしこの地方では鎌倉を略して唯単にくら（倉）街道と称している。尚この街道はそれより古く、奈良、平安の頃の足柄道であり、又一部は箱根路でもあった昔の官道であった。お隣り二宮町辺ではこの「くら街道」の外に別に「西街道」とも称しているが、恐らくこれは東海道が開けた頃も、この街道が尚重要視されて東海道に対して「西街道」と称したものであろう。

而かし今日この道を通る人はほとんどなく、所によっては夏草が覆い繁げり、或は道巾も狭まり、或は曲りくねって、こんな道を人や馬がどうして通ったものかと疑問を持つ程である。ところが細部に亘ってよく観察すれば、古い山王祀あり、道祖神あり、或は地名に「大迎え」、「鎌倉山」「将軍山」があり、尚この古道に沿って、数多くの史跡や古社等があって、当時村八景の一つ、曽我山の暮雪を踏み、又春は春でたんばゝ或は崩い出でる若草や新緑の中に、雲雀のさえずりを耳にしつゝ、沿道の史蹟や芭蕉の句碑等を尋ねられる。唯おしいことに数年前、寄る年波の為かあの有名な大樹六本松が枯死したことである。



曽我兄弟練武処。
眺望絶美俳聖訪。
古道老松語往時。
（六本松峠私の駄作お笑い迄に）

註①二宮氏居館跡ー中村庄司平宗平四男、二宮四郎友平居館跡②知足寺ー友平長男太郎朝忠の室、花月尼（曽我兄弟の実姉）建立の古刹、寺内に兄弟の墓がある③吾妻神社ー日本武尊の第橘姫を祀る④等覚院ー吾妻神社の別当寺、寺に同社の御神像を蔵す⑤中村屋敷ー豪族中村氏第三次居館跡、屋敷神稲荷社あり、稲山砦跡⑥川勾薬師ー川勾大明神御前立、一ノ鳥居、江戸時代小田原ー大磯合いの宿跡⑦神宮寺ー成就院と称し川勾大明神別当寺その下に宮司二見家がある⑧川勾神社ー相模国二宮大明神とも称す古社⑨奥ヶ入りー推定師長国発祥の頃の都の跡⑩第二次中村氏居館跡ー地名に、小太郎、丸台、城山等、屋敷神神明社あり尚北条早雲、三浦道寸対陣の折は三浦方砦⑪禅龍寺ー中村氏建立の古刹、近年寺門に五輪塔凡そ六十基出土した⑫光福寺ー道場の地名はこの寺の念仏道場から出ている⑬旧家志沢家ー古社川勾神社簡粥国府祭茅巻神事に関係している⑭白髭神社ー中村郷下ノ中村総鎮守、但し第三次鎮座地⑮托家ー池上屋敷、中村川が昔これより池、御散原が池尻で前川で海にそそいだ⑯山屋敷ー豪族中村氏の陰居屋敷？五輪塔数基、稲荷社がある⑰馬場、馬場先矢先ー中村氏家臣の練武場跡⑱東際寺ー中村氏建立、関東管領足利氏満真筆額、位牌等がある⑲虔教寺ー日親作祖師像に上杉謙信小田原攻を記してある⑳陰石ー道祖神にあり㉑横穴古墳群ー凡そ四〇基あり㉒殿ノ窪ー中村庄司平宗平以降第一次中村氏居館跡㉓第一次白髭明神跡ー別当寺けりん坊等跡あり㉔山王台ー出戸水、砦跡㉕大迎え、鎌倉山、将軍山ー将軍頼朝が帰倉の折中村氏が出迎えた所㉖五郎足跡ー曽我五郎力だめしに石を踏み足跡が出来た㉗六本松ー曽我ー中村の峠、芭蕉、白雄等の句碑、准后道与の歌㉘曽我太郎祐信塔ー大きな宝筐印塔がある㉙宗我神社ー曽我の里の総鎮守㉚城前寺

木瓜紋と大伴氏

加藤誠夫

木瓜（寒）紋

家紋として用いたのは、徳大寺家である。「源礼記」には徳大寺実能が錦袋にもっこうを押した御剣一ロを献上したとある。この実能は、自家の車にもこの紋を用いているから、すでに、このころ家紋として定着していたことがわかる。武家で此の紋を用いたものは、越前朝倉氏。足利時代では、織田、遊佐、秋本、熊谷、折野、松岡、海老沼の諸氏、徳川時代になると大名の堀田、有馬氏。で、

旗本では百六十余家もこれを用いた。

窠紋の基本的パターンは横木瓜とたて木瓜であるが、ともにそとわく、なかわくおよび中心部の花状の部分からなり、そとわくは四個がふつうである。五っ、六っなどの場合は、五葉、六葉瓜とよぶ。また窠紋の数でよぶときは、一から九までであり、それぞれ一っ木瓜二っ木瓜という。他の紋章と組合わせたものとしては二っ引両、庵、剣。割り菱十字形にのせたもの（中津木瓜という）などいろいろである。

木瓜紋を用いた氏族は、日下部氏、伴氏及び紀氏である。日下部氏は孝徳帝の皇子、有馬皇子の後裔で、その子孫は、但馬を中心として朝倉、朝来、太田垣、八木、奈佐などの氏族にひろがっている。家紋は三っ木瓜。

伴氏は道臣命から出ている。代々大伴氏と称して、軍事で朝廷に仕えたが、のち伴氏と改めた。善男のとき、応天門の変で、家門がおとろえた。のち子孫は三河に土着し、一族は設楽。富永。大原。毛牧。大島。山岡。笹山。の諸氏になる家紋は、木瓜

紀氏の系統では、堀内。滝川があり、織田氏の武将滝川一益などもその後裔である。その他使用家は、丹羽（三っ木瓜）。佐々竹（山形木瓜）。中川（六葉木瓜）高力（桐丸に横木瓜）。浅井（いげた内横木瓜）。佐野（剣木瓜）。人見（六っ木瓜）。分部。伊藤。川田の諸氏は（庵木瓜）である

大友村と盛泰寺

内田武雄

大昔此の村は大伴と言ひ四天王寺の封戸と言われている。天長七年今の地名大友と改めたと言う古書ものこっている。

慶運の頃大友の皇子此地ニ潜ミマシマシ、ヨリ大友村の村名起りしなりとの口碑あり、元松田左衛門尉頼秀の所領を寛正三年十二月廿一日其闕地（今の東大友）を裂て堀越御所左兵衛督政知、鶴岡八幡の社領に寄進したので村名は西大友と東大友に分れたのである。

西大友村宝珠山、盛泰寺は曹洞宗で今の住職のお話では此の寺は元天台宗であったとの事である。

当寺開墓宝珠院殿一品大友君公盛泰大居士尊霊、裏面に慶運二乙巳年三月廿六日大友村施主松鳴主人と記した位拝がある、此の位拝に付いては江戸時代に新しく作りかえたようであるが住職のお話しでは私しが子供の頃まで境内に方一門四面ぐらいの皇子塚と言う塚があったとせつめいしてくれたので、さっそく現地を調べたところ今では梅の枯ぼくが一かぶのこっていた

実は私しが盛泰寺を調べにいったどうきわ先日加藤誠夫さんから、相模国大意ヨリノ抜書を見せていただいた時に大友の盛泰寺の文書があったので皆様に御披露いたします。

相模国大意抜書ヨリ

一、盛泰ノ莫

大友村盛泰寺ニアリ大友黒主ノ子也。一品大友君公盛泰大僧都トアリ、慶雲二乙巳年三月廿六日薨去。

同松八幡宮ノ神体も同作網一色村夷宮盛泰住云々。此の文書を見ても盛泰寺開墓一品大友君公盛泰大僧都はゆえあってこの土地に潜んでいた事もあきらかのようです。盛泰寺の皇子塚もおそらくこの人の墓てあろうと思われる。

又この文書中に同松八幡と書いてあるのはあるいわ正八幡のあやまりでわなかろうかとも思われる。

峯堅雅老師を悼む

岸　仙外

峰　堅雅老師

師走八日、飯泉観音勝福寺の峯堅雅大僧正が遷化せられた。峯老師が史談会の生みの親であったことは知る人も少なくなったが、史談会をつくろうと、立木杜天居士と亡き滝口伊将大人と小生の三人で飯泉に参上して、誠意と熱意に溢れる有益な助言と激励を賜わった日のことは、今でもありありと思い出される。発会式にも出席されて、今の市民会館の場所にあった旧中央公民館で来賓代表として祝辞をのべて下さった。

峯老師は明治十六年八月十八日小田原藩士族峯家に誕生され、幼にして、蓮上院山主高木快雅大僧正のもとに出家さそ、英才の誉れ高く、井上円了師の京北中学校哲学館を卒業、更に七高を経て明治四二年東大文学部を卒業された。

以来僧籍にありながら教育界に活動され、小田原町立女学校長、静岡県女子師範学校長等を歴任せられた。昭和十年頃公職を辞し真言宗大本山東寺の重役に就かれること数年、以後約三十年間は名刹飯泉山にあって法輪を転ぜられた。

峯老師のお名前と共に誰でもあの錫杖をついて悠々と歩かれる姿を思い出されるであろう。常に法衣をまとわれ、きれいに浄髪されいかにも坊さんらしい坊さんには、これから二度とお会いできないような気がする。しかも生れはあらそえず、古武士の如き見識と気魄とをもっておられた。又いろいろ人生体験もされたらしく、私共の知る後半生は智識や地位を包みかくして高僧らしい円熟された風格があたりをはらう趣きがあった。心ある人が続々と飯泉山に老師の風貌に接すべく参上したのも当然であろう。

晩年に至り宿願の観音堂の修理もなり、大庫裡や本堂も完成せられたのは一に老師の徳の力であり大功績であることはいうまでもない。九十才の高令を以て逝かれたのは、やはり偉れた御生涯であったと頭を下げるのみである。しかし小田原地方に再び朱塗の錫杖のさびた音がきこえないことを思うと、哀惜の念切なるものを禁じえない。

横山一党の本拠城（下）

愛甲三郎の弓と畠山重忠の死

神保　酉蔵

重忠益々、不審に思ってみたが君命なればと、一族郎党百三十四人を随えて、菅谷の館を発し。入間川を経て、府中を過ぎ、多摩川を渡り二十三日の午の刻、武州二俣川に達すると、重保の郎党、馬を馳せらせて来り、一大事起り候若殿今暁由比ケ浜にて討死なされ候、早々御引返えされ給ふべし。と云へば、一同聞くより皆色を失ふ、重忠唯、黙然として、漸し言なし、やゝあって「定めし讒者の所業であろう、期くなるも天命なり命なり、復何をか嘆くべきか、六郎既に討死するからは、我れ独り生きたとて何かせん、此処に、討死するこそ好もし」。と告げ泰然として、更に慌てる色もなし、近常進み出で「仰せの如く讒者の所業に候なれ、今更、弁解も其甲斐も候まじ、急ぎ菅谷の館に引返し、大敵数万引受けて、命限り魂限り防ぎ戦い天晴武名を、後の世に残し武士たるものゝ面目を、立てるこそ好し」。と云へば重忠聞いて打笑ひ

「我生れて四十二年、常々正義を守り、人道を重じて聊かも、非道の事を行なわず、然るに、今や、無実の罪を獲て、死せんとするこそ天命の然らしむる所、復是非もなきにあらず、それが為め、永く不臣の名を、受けんか、死後の遺憾、此上あるべからず、玉は砕けて光あり、人は死すとも、義を失はざらんこそ好けれ城を守ればとて、終に助かるべき命にあらず、何を願うてか、国に還らん、敵来るとも、甲冑を、帯びること勿れ、礼義を失ふことなれ、但し坐して刃を、受けんも武勇なきに似たり、快く一戦して、潔く死するべし、討手の諸将皆朋友なり穢（きたな）き振舞をなして、笑を招かざるよう心がけよ」

と云て、鶴ヶ峰に陣をして酒肴を取り寄せて、心静かに名残りの宴を催す、我子死すとも悲しまず、敵軍近づけども恐れず、談笑自若少しも平生と異ならず、大将此の如し、士率亦皆笑って死に就かんと心に期す。

義時、時房大軍を率いて揉に揉んで、二俣川に達す

重忠鶴ヶ峰に、在りと聞くより、諸軍、屹と、彼方を望みて、見れば、人は鎧をも着けず、陣には楯も建てず、総勢僅かに百騎ばかり、此方に向って、整然として、並ぶ将士

「扨も不思議や、謀叛を企てゝ、鎌倉を襲はんとするものが、斯かる小勢、斯かる扮装（いでたち）にて、来るべきか、必定、無実の罪にてぞあるべし、武士の亀鑑とも謂はる畠山なり、争かで無謀の戦を起こさんや」。

皆、初めて、それと覚るが、今さら後へ引きようもなく、此処に、大戦を操り広げる事になった。

二男重秀を始め、百余の勇士大刀を揮って、従横無尽に奮い戦い敵を打つこと数百、寄手衆と雖も敵せずやゝもすれば、退かんとするので、愛甲三郎季隆が、迚も遁れぬ運命なれば、我が矢先きに、掛けて死なさんと、矢頃を計って、ヒョウと放った矢が、重忠の脇

腹に突立ちて、討死となるが、愛甲三郎季隆の悲しき名誉の弓となったのである

畠山一族を此様にして、滅すまでには、大小種々の問題がある。

吾妻鏡にはどのように記されているか、私は知らない、其の様な事は先生方に御願ひするより外にありません、只私は日本史蹟大系や郷土の研究家のお話しを聞いてのことですので其点御了承下さることをお願ひ致します。

梅林と古墳

神保　栄

私の子供の頃、母はランプの下でせっせと紫蘇巻梅干を作って居り、聞きましたら町へ土産に持って行くのだと言ふ事でした。学校へ行く様になり村の商人の家で附近の女の人が大勢紫蘇巻梅干を小樽に詰めて軍隊に納めるのだと聞きました。上級生に進んだころ、鉄道唱歌や物産唱歌をを教へられましたが、物産唱歌に「秦野の煙草風味良く、厚木の綿布質強し、小田原梅干世に知られ、箱根に挽物細工あり」と言ふのが有り私は好んで此の歌を唱いました。青年になって曽我の梅干は前川の商人に売らて行く事を知りました。

下曽我駅が出来たのは、小田原駅の出来た次の年、大正十一年五月十五日でしたが、地震後、雨後の筍の如く料亭や、芸妓屋が出来て、二業組合が出来、梅林で芸妓の手踊りや宝探しを行いめづらしいので見物人も集りました。此の行事も戦争の為廃止されましたが近ごろ小田原城外での梅祭りも催され、下曽我でも商工会の梅祭りも、お茶の野立まで出来たり、俳句会まで加わり土地の人々も喜んで居ります。尚駅が出来たので梅林に絵を書きに有名人が毎年来られますのは、富士を西に見えるからでせう。下曽我が小田原市へ合併した時梅の紋章の付いた記念品を戴きましたがどなたの作かと思いました。其の後病院から電話で、病院で敷地を拡張した場所から土器等が出て、今日も赤星先生が御出でになると電話で教へて貰ったので、友と二人で行きましたら先生は学生等と掘って居られました、稲や梅の実もかなり出て来ました。鹿位の下あごが出たと思ふと、側に上の平な石が出て、横に丸太がならべて、酒匂川の砂の如き砂を敷いた場所が出ましたが、先生は千年も前の井戸だと申されました。考へて見ますと曽我山麓には法輪寺の附近の殿沢川の小地域から石器も出ますし、古墳や横穴古墳が田島から別所、谷津、上曽我、大沢辺りまで多数有りますが、住所は従って永塚、千代への台地に求めたのでせうか、且って米軍が富士への演習に宮の下で車を止めて、梅林を見てワンダフルと云ふておりました。

梅咲くや富士を背にして前にして　明峰

三浦七福神略縁起

三橋　正四郎

①金光恵比須（南下浦町金田二五八、円福寺）遠い昔の一夜、金田湾の海上に光るものがあるので、漁夫が怪しんで拾い上げた所、黄金の恵比須像であった。村人こぞってお守りして、天文十七年鎌倉光明寺の伝設大和尚を招いて開山となし、金田山円福寺となす。

②白浜毘沙門天（南下浦町毘沙門六六九、慈雲寺）

ここは持陽山慈雲寺毘沙門堂と称し、応安元年妙見大和尚によって開かれた。毘沙門天像は行基菩薩の御作と伝えられ、智恵と勇武の守り神としてあがめ特に北方を守る武神で厄除け恵方の毘沙門天である。

③鶴園福禄寿（向ケ崎町十一ー一、大椿寺）この寺は寛喜二年、建長旭永大和尚を開山とする禅寺で、昔源頼朝が多くの将士を引連れて来遊した「椿の御所」であり、この福禄寿は、鶴を抱いている姿から鶴園福禄寿と呼ばれ幸福、財宝、長寿の三つを吋える三星の化身である。

④筌竜弁財天（三崎町一ー十八ー一、光念寺）治承四年、源頼朝の挙兵も戦い利あらず海路房州に逃れたその時大暴風雨に逢い流されて兵糧尽きた時、竜神に祈った処「筌」という竹製の漁具が流れ来り、これを用いて魚をとり、飢をしのいだ。建久元年鎌倉幕府が成立するやこの地に「筌」を祀り弁財天堂としたのが筌竜弁財天の縁起で、この弁財天は八臂弁財天といい大漁満足、財宝如意、容色端正、弁智増上、芸能上達等の希望を叶えて下さる女神である。

⑤長安寿老人（三崎町小網代一五一六、白髭神社）昔一人の漁夫が網にかかった御神体を海中から引揚げお祀りをした、御神体は中筒男命、別名白髭明神、南極星の化身といわれている大殿の右奥にある石は鳴石一名カンカン石と呼ばれ、これは昔の石錨で海上安全のために昔の船頭が社におさめたものです。

⑦寿福大黒天（初声町下宮田三四〇三、延寿寺）この寺の開基は日蓮宗九老僧の一人、日範上人で延宝三年の建立。この大黒天は日竜上人というその門弟の上人が一刀三礼儀をもって刻まれたもので甲子の日が御縁日となっており、富貴、長寿特に豊かな食生活が約束されるというめでたいものである。

原稿のお願い

感想、随筆、和歌、俳句雑文、会員の動向等なんでも結構ですから皆様のご投稿をお願い致します、原稿は一般用紙（四百字詰）では三、四枚。会の用紙（百二十字詰）は五枚～拾枚以内にお願い致します。原稿の送り先は市内栄町二ー二小林泰助まで。（編集部）

（川柳）時事吟　広沢十五夜

街角のポスターに見る虚偽の顔
二十年叫び無罪に深い皺
舞台裏見せず長びくパリ会談
こもごもに語って悲喜なる勝訴
どよめきが抱き合って泣く二十年